

## 自然生態系保全と歴史的建造物保存

技術研究所が注力している研究開発分野に自然生態系保全と歴史的建造物保存がある。この二つの分野は建設産業にとっては社会的責任としても推進すべき分野と考えている。

これらの研究開発遂行の意義と方法論を深く検討すると、個人の思想・信条の問題に行き着く。自然生態系の保全の場合、その思想の一つの極に自然は一切人間の手を入れないのがもっとも良いとする考えがある。もう一方の極は経済の発展や人間の生活の安全・快適のためには自然の改変は止むをえないとする考えである。

歴史的建造物の保存でも同様である。歴史的建造物の保全の必要性は当然であるが、如何なる建造物も何時かは滅するものであり、人間の手を加えて保存する必要は無い、自然のままに任せて保存するのが良い、とする考えがある。

と同時に一方では、もとの姿を維持保存するために、最新の技術を用いて補強補修するのが良いとする考えもある。また建造物の全てを保存せよとの考えもあれば、重要な部分を一部保存するので良いとする考えもある。

自然の植生は遷移するものである。ある時期自生していた植物も時が立てば他の植物に置き代わっている。もし現在の植生を維持保全しようとするれば適度に人間の手を加えなければならない。

日本人の心の原風景として里山がある。この里山は長い年月人間が手を加え保存してきたものである。もし人間がこの行為を中止すれば、瞬く間に樹木が繁茂し、そのために日陰となった背の低い植物は死に絶え、やがて猿や猪やたぬき等の動物に必要な植物も無くなってしまう。

アマゾンのジャングルも時に落雷による火災によって攪乱されることにより適切に維持保全されていると言う。

自然と人間は共存出来るものであり、またそうすべきである。問題は生き物の中で人間と言う種類が圧倒的に増殖し、自然を無視し、わがままになったことである。人間の幸福と自然の保全は共存と葛藤を繰り返していくであろう。この両者に最適な解を求めるために研究開発の努力を行うことは意義あることと考える。建設業こそはその研究開発の最先端に立つべきものであると信じている。

歴史的建造物にあっても、各建造物に重要度を与え、保存すべきものと、取り壊し立て替えるものとが区別されるのは致し方ない。また部分的な保存で良しとするのも、近代的な技術で補強・補修するのも良しとすべきと考える。

自然生態系保全も歴史的建造物の保存も単に社会的責任や一企業の理念で行うのは長続きしないと考える。すべて経済活動のなかで位置付けられて始めて永続的な効果が得られると考える。

1999年9月

清水建設株式会社

執行役員 技術研究所長

工学博士 藤 盛 紀 明